

# 地域居住類型と生活意識の諸側面

勅使河原 勝 男

## A type of community-consciousness and several sides of life-consciousness

Katsuo Teshigahara

私は、かつて、館山市H地区において、父母の教育意識調査を行った。その中で、調査の文脈とは外れるが、地域への密着、接近、親近感と校区小学校や地域の活動への参加意識との間には、何か関連がないものかと考えた。そこで、次の様な類型を設定し（表1。「地域居住類型」と、とりあえずしよう。）、学校、地域への関心との関連を見た。その結果、極めて明瞭な意識や態度の差が認められた。

「土着群（本稿では「定住」とする）、定着群、脱出群、移動群の4つのグループを操作的に類型化し分析を進めてきた。……土着群と脱出群は（H）地域という同じルーツをもつグループである……。しかしながら、……地域集団への参与の態度においても後者が明瞭に積極性をもっている……。／教育に対す

る意識や態度については、土着群と定着群で似通った性格・内容を持ち、脱出群と移動群で全体として類似的である。そして際立った対象を土着群と脱出群で見ることができる。／例えば、学校教育への期待は土着群で極めて高いのに比して、参加意志は弱い。脱出群では全くその逆である。……あるいは関心の寄せ方も、土着群では学校行事などを中心とするものであるが、脱出群では施設や設備、PTA、教員人事など教育の周辺をも含めて関心を示す。また、小学校とのつながりでも脱出群、移動群では教師、父母との直接的つながりが濃いのに、土着群、定着群ではより間接的なつながりが強い。」（勅使河原勝男『父母の教育意識と地域社会学校の可能性』『人間科学研究』第3号 1981年）

常識的に考えるならば、その地域で生まれ

表1

いつH(M)地域へ	今後も住むか	H 地 域	M 地 域	類 型
親の代以前	ずっと住むつもり	37.0 (343)	29.7 (68)	→「定 住」
	他の土地へ	15.2 (141)	2.6 ( 6)	→「脱 出」
自 分 の 代	ずっと住むつもり	31.4 (292)	42.8 (98)	→「定 着」
	他の土地へ	16.4 (152)	24.9 (57)	→「移 動」

実数：パーセント ( )内：例数、以下同じ

育ち、これからもそこで生きている人々——「定住層」——が、地域活動へも校区小学校へも積極的に関心を示し、参加していくものと考えられる。しかしながら、上述の結果は、その姿を伝えず、「脱出層」「移動層」に強い傾向として出ている。そこで、何かその追試をできないものかと考えていた。そこで、このような関心を意図したものでない調査で同様の分析を試みることにした。

## 1. 調査の概要

ここで分析対象とする調査は、1983年7月に埼玉県M市における住民意識調査である。この調査は、文教大学人間科学部の社会調査実習の一環として行われたものである。学生の関心の多様さを反映し、テーマの統一のまともではなく、思うが儘、自由に作った調査票によって、面接調査を行った。

余談になるが、学生がフィールドへ出ると面白い話しをもって帰る。この調査の中で印象に残っていることを次に記しておこう。

その1。S君。彼は午後の8時という約束で面接に行った。終わると、対象者がこれから何処かへ行くのかという。S君が今日はこれで終わり、と言うと、1人足りないからマージャンをと言われた。12時までやって、2000円をせしめてきた、とのこと。

その2。O君。のっけから、ある対象者の家でこんなことをやって何になると、どなられた。調査票をとられ、めぐりながら、さんざん悪口を言われた。彼は一切反論せず、しかし、相手の目を見て返事をしていった。そのうち、対象者が「よし、お前の根性が気に入った」と言って、坐り直して（もちろん、すててこで、あぐらだが）、調査に応じてくれたという。

その3。調査チームの中の1人。家庭の事情で、ということで調査をしないで家へ帰ってしまった。実家へ電話をかけても通じない、下宿へ連絡しても居ない。でも、私にはよく

分からないが、彼女を探し出し、誰かが（いつも、2、3人だったらしい）、ついていって彼女をカバーして調査をやり終えた。

見ず知らずの人に会い、話す、これは大変なことである。

調査対象者は、男女計317サンプル。対象者の抽出に当たって、地域についての質問と学校教育についての質問を多く含んでいることを考慮し、子どものいる成人に限定したこと、土着層であろうと推定できる人を意識的に多く抽出したこと、この2つの操作を行っている。さらに、対象者を市内全域から取ることは、調査の日程上時間のロスが多く調査のスムーズな進行にさしつかえるので、M市北部に限定した。この地域は、最近、公団住宅が建てられたり、1戸建住宅の建設が進み、住宅地化の著しいところである。以上のことによって、多段階層化抽出法を行ったものと考えてもよい。

回収は229サンプル（回収率72%）である。

調査方法は、調査票による面接法である。

## 2. 地域居住類型と属性

有効回収数229サンプルについて、属性による分析を行う。

以下のことを分析の前提として述べておかなければいけない。館山市H地域においては「定住群」「脱出群」「定着群」「移動群」の4類型を設定し、他の諸変数の関連を検討した。ところが、表1で見ると、本報告に使用するM地域の調査データでは、「脱出群」が少なく（全体の2.6%、9サンプル）、分析の対象にならない。そこで、本報告では、「脱出群」「移動群」——現在の居住地から、「他の土地へ移りたい」としている点で共通している——を合わせて、「移動・脱出群」として、3つのグループを設定することによって、分析を進める。

対象者の属性として取りあげるものは、性別、年齢、学歴、職業であり、対象者の個人

的属性ではないが、M市内を街区、町別に細分化した居住地区、家族周期と家族類型である。それらを一括して、表2において、地域居住類型との相関係数を示してある。職業の0.513から性別の0.255までの間に各変数は位置し、高い相関を示している。また、表3、4、5で示したカイ2乗値でも、いずれの変数も、1%の有意水準で、地域居住類型との間に、有意の差を持っている。

居住地区との関係では、対象地域の北部が旧来からの水田を中心とする農村地帯であり、現在もその状況を色濃くもっており、そこに

表2 地域居住類型と属性の相関

属性変数	相関係数
居住地区	0.390
性別	0.255
年齢	0.419
学歴	0.325
職業	0.513
家族周期	0.359
家族類型	0.390

数値はCONTINGENCY COEFFICIENT

定住層が多く、それに対し南部は、武蔵野線が開通し、近年急速に住宅地化が進み、そこに定住層、移動・脱出層が多いということによる。前者の典型は、H地区(60サンプル)のうち、定住層41.7%、定着層40.0%、移動・脱出層18.3%であるのに対し、後者の代表的であるW地区(109サンプル)では、それぞれ、11.9%、51.4%、36.7%となっている。定住層の比率が双方で高いのであるが、これは、両地域とも他からの移住者の多さを示すものであるが、新興の住宅地居住者ほど「他の土地へ」という願望が強いことを、移動・脱出層の数字を示している。

性別との関係では、定住層が男性に多く(男性のうち、定住層41.3%、定着層40.4%、移動・脱出層18.3%、女性での構成比は、それぞれ、20.0%、44.8%、35.2%)、女性で、移動・脱出層が多い。

年齢別でもそれぞれの特徴を示している。定住層で50歳以上の年齢層の比率が高く、定着層では40~44歳層、移動・脱出層では30~34歳層で高い比率である。年齢各層のモードには10歳の巾がある。若い年齢層ほど移動・

表3 地域居住類型と性別・年齢・学歴

		定住	定着	移動・脱出	計
性別	男	63.2 (43)	42.9 (42)	30.2 (19)	45.4 (104)
	女	36.8 (25)	57.1 (56)	69.8 (44)	54.6 (125)
$\chi^2 = 14.884 > 9.210 = \chi^2(0.01)$					
年齢	29歳未満	2.9 (2)	6.1 (6)	6.3 (4)	5.2 (12)
	30~34歳	13.2 (9)	17.3 (17)	34.9 (22)	21.0 (48)
	35~39歳	20.6 (14)	20.4 (20)	31.7 (20)	23.6 (54)
	40~44歳	13.2 (9)	34.7 (34)	7.9 (5)	21.0 (48)
	45~49歳	20.6 (14)	14.3 (14)	14.3 (9)	16.2 (37)
	50歳以上	29.4 (20)	7.1 (7)	4.8 (3)	13.1 (30)
$\chi^2 = 48.678 > 23.209 = \chi^2(0.01)$					
学歴	義務教育	61.8 (42)	32.7 (32)	28.6 (18)	40.2 (92)
	中等教育	36.8 (25)	41.8 (41)	47.6 (30)	41.9 (96)
	高等教育	1.5 (1)	25.5 (25)	23.8 (15)	17.9 (41)
$\chi^2 = 26.951 > 13.277 = \chi^2(0.01)$					
合計		29.7 (68)	42.8 (98)	27.5 (63)	100.0 (269)

注) 実数はパーセント、( )内整数は例数。また、 $\chi^2$ 値はその変数の個有値。 $=\chi^2(0.01)$ は1%有意水準のカイ2乗値。なおパーセントは縦計である。(以下同じ)

脱出層に強い傾向をもつ。

学歴別では、定住層で義務教育61.8%、定着層、移動・脱出層でそれぞれ高等教育25.5%、23.8%を含む。前者は比較的 low 学歴層を多く含み、後2者は相対的に学歴が高い(表3)。

ところで職業であるが(表4)、集計はすべて男女を混みしてあるので、パートタイム従事、主婦というアイテムを含んでいる。定住層においては、農業、商・工自営層の比率が高い。定着層、移動・脱出層では、専門・技術、事務・販売などいわゆるサラリーマン層が多いし、婦人のパートタイムへの就労率、主婦層の比率が高い。これらの層で婦人の構成比が高いことと通じている。

表5は、家族関係と関連を示しているものである。家族周期は、子どもの学齢によって決めている。それは、長子が就学前→養育期、長子が小学生か中学生→教育前期、長子が高校生か大学生→教育後期、末子が高校卒業→独立期としている。定住層においては、独立期、定着層では教育前期と後期、移動・脱出層では教育前期というパターンを読み取れる。子女の成長ということを考えると、定住層では、やれやれ—安心、というところであり、定着層は、今が大変、移動・脱出層では、さあこれからだ、ということなのであろう。当

然のことながら、年齢との関係と対応している。

家族類型との関係は、表5で見る通り明瞭である。定住層には、47.0%の直系、複合家族を合わせた拡大家族を含んでいる。夫婦家族は53%である。それに対して定着層で86.7%、移動・脱出層で88.9%がいわゆる核家族であり、著しく都市家族的傾向を示す。

ところで、もともと地域居住類型の設定は、居住歴と永住意志から導き出したものである。それ自体、独立した変数と考えられるが、以上見てきた通り、属性——これは、事実あるいは現実の側面である——と深いかかわりを持っている。むしろ、地域居住類型は、諸属性によって規定されると言えるくらいである。今、それぞれの類型が、属性のどの部分とかわっているのか、キーワードを並べてまとめておきたい。

定住層——従来からの農業地域、男性、高年齢、低学歴層を多く含む、農業ないし商・工自営層、子どもの独立、拡大家族

定着層——新興住宅地、中年層、高等教育、サラリーマン、主婦、パートタイム、教育前・後期、核家族

移動・脱出層——新興住宅地、若年夫婦、高等教育、サラリーマン、主婦、

表4 地域居住類型と職業

	定 住	定 着	移動・脱出	合 計
農 業	35.3 (24)	3.1 (3)	1.6 (1)	12.2 (28)
商・工自営	13.2 (9)	10.2 (10)	6.3 (4)	10.0 (23)
経営・管理	8.8 (6)	5.1 (5)	3.2 (2)	5.7 (13)
専門・技術	4.4 (3)	11.2 (11)	9.5 (6)	8.7 (20)
事務・販売	10.3 (7)	13.2 (13)	15.8 (10)	13.2 (30)
勞 務	7.4 (5)	9.2 (9)	— (—)	6.1 (14)
パート・タイム従事	4.4 (3)	15.3 (15)	15.9 (10)	12.2 (28)
主 婦	7.5 (5)	26.5 (26)	36.5 (23)	23.6 (54)
無 職	— (—)	1.0 (1)	6.3 (4)	2.2 (5)
N. A.	8.8 (6)	5.1 (5)	4.8 (3)	6.1 (14)
合 計	29.7 (68)	42.8 (98)	27.5 (63)	100.0 (229)

$$\chi^2 = 81.719 > 40.289 = \chi^2(0.01)$$

パートタイム, 教育前期, 核家族

### 3. 近隣との関係

表6は, 近所づきあいの程度とつきあいの意識についてのものである。近所づきあいの程度では, もっともつきあいの程度の低いものとして, 「近所にどんな人がいるか知らない」というアイテムを入れておいたが, これへの解答はなかった。各類型についてみると, あいさつ程度というもっとも軽いつき合いをしている人は, 定住層<定着層<移動・脱出層となっており, 移動・脱出層で軽いつき合いの比率が高い。近所づき合いのもっとも深い形として, 悩みごと, 心配ごとを相談する人がいる(表中, 「相談をする」)人は, 定住

層でもっとも多い(42.6%)。定着層では, 世間話をする程度のつきあい, とする比率がとくに高い(49.0%)。定着層, 移動・脱出層とくらべてみると, いっしょに買い物に行く, 相談をするとする者が後者に多いことがわかる。これらのことから, 近所づきあいを質的な面から序列づけると, 濃い方から定住層>移動・脱出層>定着層となる。

近所づきあいをわずらわしいと思うかとの質問の結果が下欄の表である。全体で, そんなに気にかけていない人が, 87.2%(たいして, まったくの合計)である。どの類型でも87~90%が, 気にかけていないとしているが, しかし, 類型とわずらわしさの順序尺度との関係は, 特徴的である。まったくわずらわしくないが, 定住層(70.6%)>定着層(50.5

表5 地域居住類型と家族

		定 住	定 着	移動・脱出	計
家族 周期	養育期	14.7 (10)	16.3 (16)	14.3 (9)	15.3 (35)
	教育前期	27.9 (19)	44.9 (44)	61.9 (39)	44.5 (102)
	教育後期	25.0 (17)	31.6 (31)	15.9 (10)	25.3 (58)
	独立期	32.4 (22)	7.1 (7)	7.9 (5)	14.8 (34)
$\chi^2=33.832>20.092=\chi^2(0.01)$					
家族 類型	夫婦家族	52.9 (36)	86.7 (85)	84.1 (53)	76.0 (174)
	夫婦家族(欠損)	— (—)	— (—)	4.8 (3)	1.3 (3)
	拡大家族	44.1 (30)	13.3 (13)	9.5 (6)	21.4 (49)
	拡大家族(欠損)	2.9 (2)	— (—)	1.6 (1)	1.3 (3)
$\chi^2=40.983>16.812=\chi^2(0.01)$					
合 計		29.7 (68)	42.8 (98)	27.5 (63)	100.0 (229)

表6 地域居住類型と近隣関係

		定 住	定 着	移動・脱出	計
近所 づきあいの 程度	あいさつ程度	19.1 (13)	24.5 (24)	27.0 (17)	23.6 (54)
	世間話をする	30.9 (21)	49.0 (48)	31.7 (20)	38.9 (89)
	いっしょに買い物 相談をする	7.4 (5)	11.2 (11)	23.8 (15)	13.5 (31)
		42.6 (29)	15.3 (15)	17.5 (11)	24.0 (55)
$\chi^2=26.704>16.812=\chi^2(0.01)$					
近所 ・わずら わしいか	とても, わずらわしい	1.5 (1)	1.0 (1)	3.2 (2)	1.8 (4)
	すこし, わずらわしい	8.8 (6)	11.3 (11)	12.9 (8)	11.0 (25)
	たいして, わずらわしくない	19.1 (13)	37.1 (36)	53.2 (33)	36.1 (82)
	まったく, わずらわしくない	70.6 (48)	50.5 (49)	30.6 (19)	51.1 (116)
$\chi^2=22.214>16.812=\chi^2(0.01)$					

%)>移動・脱出層 (30.6%) となっており、  
わずらわしいとした者、たいしてわずらわし  
くないとした者の割合は、その逆となってい  
る。

つきあいの程度——つきあい方、態度でも

あるが——、深くかかわりあっている定住層  
において、そのつき合いを決してわずらわし  
くは思っていないというのだ、という意識が  
重なっている。濃密な近隣の社会関係の存在  
を、定住層で予測される。(以下、続報)